

須田記念

2019年11月

第1号

視覚の現場

特集 関西の洋画



目次

座談会 「須田国太郎」をどう捉えるか

島田康寛（司会）、原田平作、橋秀文、中谷至宏、土森智典、平井啓修／須田寛……………	5
須田国太郎資料／島田康寛……………	27

特集 関西の洋画

カラー・グラヴィア——作品解説／原田平作……………	33
特集「関西の洋画」関連カラー・グラヴィア解説／原田平作……………	49
石佛群を抱く枯山水の平原——須田国太郎の見た雲崗石窟寺院／稲賀繁美……………	52
須田国太郎と牧溪／太田孝彦……………	55
「京都洋画」への私的断章／太田垣實……………	58
吉田利次——戦後のモダニズム思潮に背を向け、働く民衆の心を描き続けたリアリズムの画家／ 中塚宏行…	61
脳血栓の発作による半身不随を克服した稀有な画家 藤田龍児遺作展を開催して／ 星野桂三…	64
一九五〇年代の関西洋画家たちの交遊（覚書）／米田耕司……………	67

今言いたいこと

忘れられたコレクター、忘れられたコレクション／池田祐子……………	73
スードと春画／河野元昭……………	76
破壊された伊丹の彫刻作品《白鳥の泉》／坂上義太郎……………	78
プレス内覧会と「報道の不自由」を考える／白鳥正夫……………	80
エクス・アン・プロヴァンス、セザンヌ研究・資料センターの開設／永井隆則……………	83
「最近の学芸員は展示が下手だ」という大先輩の言葉／横山勝彦……………	86

英文要旨

各記述／各執筆者／翻訳＝川上幸子

編集後記／原田平作



表紙解説・表

須田国太郎《魚市場》

1957年

油彩・キャンヴァス

72.5×91.0cm

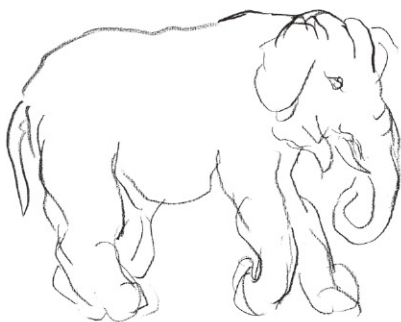
第4回日本国際美術展出品

財団法人駒形十吉記念美術館蔵

『須田国太郎画集』（京都新聞社、1992年）より転載

魚と屋根とその柱が前景になっていて、奥には家々が立ち並んでいる。《鵜》（1952年）を制作してから5年後の作品であり、中景がない点は《鵜》と同じであるが、《鵜》よりも前景後景の結びつきが強く、二本の柱が効いているように思われる。日記（岡部三郎編『須田国太郎、資料研究』（京都市美術館・京都の美術Ⅰ、1979年）によると、1957年1月に須田は岡山方面に旅行し、玉島で取材して、5月20日に「三十号やや出来 魚市場とする」とある。前年に京都市立美術大学学長代理の任を受け、大量の出血をし、学長を辞任するなど慌ただしかったときの作である。本作を見ると須田は病におかされなかったら、もう少し展開をしたのではないかと思われる。

全期を通して須田国太郎（1891～1961）の作風は、1932年の銀座資生堂でのデビュー頃までを初期と言え、以後戦前期を中期、戦後を後期と分けて鑑賞することができ、《窪八幡》（1955年）と共に本作は、その後期の最晩年に当たるとみることができる。（原田）



表紙解説・裏

須田国太郎《象（スケッチ）》

デッサン

ほんの僅かな線で描かれた象である。それでいて象の親しみ深さと重量は十分に伝わってくる。須田には能・狂言のデッサン（1927年から1956年までの分で約6000点近くあり、多くは大阪大学図書館に蔵されている）の他に、それに匹敵するくらい多数のデッサンがある。その一端がこれである。7月に出版された本誌記念号裏表紙の、能狂言デッサンの解説でも記したことであるが、須田の場合、描き込んだ多数の線描からなる表現よりも、手数が少ない僅かな線による描写の方が含蓄が深いとみられる。この場合は後者だけになっている。

なおこれらデッサンと本画との関係であるけれど、その考察はなかなか難しく、ここではまだ言及を控えざるをえないが、次の左近充直美氏の記述は参考になると思われるので、引用させていただくこととする。氏は「須田は、こうした現地での写生において自然を拠りどころにしながらも、けして自然の再現ではなく、対象の本質や精神的なものを追求していくという方法をとった。須田が油彩画を描くときは、一度画面ができあがると、パレットナイフでそぎ落としたり、削ったりしたあと再び描く、といった作業の繰り返しであったという。これらのスケッチは、いわば練り上げられる前の、須田の対象に向けての興味や直截な感覚がうかがえるものである」と簡潔に記している（『須田国太郎、没後50年に顧みる』神奈川県立近代美術館ほか、2012年）。（原田）